

シーベルトの歌曲

「さすらい人の月に寄せる歌」では、歩行のリズムを基調としながら、さすらい人が夜空に輝く月に幸福を見て、憧れを語る一方、「自分は永遠の異邦人である」と悲嘆をもらす。

「ヴィルデマンの丘をこえて」は、詩人シュルツェが叶わぬ恋に苦しんで山野を放浪した時の体験がもとになっている。ヴィルデマン（中部ドイツ・ハルツ山地の鉱山町）を見下ろす、風が吹き荒れるモミの丘陵を、野性的なエネルギーを発しながら傷ついた旅人が駆け抜けていく。

「流れの上で」は、シーベルトが亡くなる 1828 年に書かれた珠玉の名品。歌曲としては長尺で、編成も独唱とピアノにホルン（またはチェロ）が加わる。主人公は小舟に乗り、岸辺から徐々に離れていく、愛する人に別れを告げる。

ヴェレスの歌曲

「海の月夜」では、マーラー《大地の歌》でお馴染みのハンス・ベートゲの詩が用いられており、月夜の海に浮かぶ小舟の幻想的な情景が歌われる。

《異郷からの歌》に収められた「神秘的な笛」では自然との交感が歌われ、「さみしい」では愛する人がそばにいない心痛が吐露される。

歌曲集《時に》は、3 つの詩がそれぞれの視点から「時」の実相に迫る。まず「ああ、薄れゆく喜び」では、17 世紀の詩人ジョン・ドライデンの詩を用いて、移ろいゆく時の儂さを嘆く。続く「詩人と 1 日」の作者エリザベス・マッケンジー（1921-2021）は、詩歌の研究に生涯を捧げた文学者で、生前のヴェレスとも交流があった。歌の中で「詩人にとっての一日は、活動で埋め尽くされた時間の尺度ではなく、独自の気分と声を持つ精神である」と、非日常的な感覚に思いを馳せる。最後の「時に」は、『失樂園』で知られるジョン・ミルトンの作。時間の倦怠からの解脱と「永遠なる時」への賛美が、莊重な言葉で語られる。

ブラームス：《4 つの厳肅な歌》

本作が完成したのは、1896 年 5 月 7 日、それはブラームスが迎えることのできた最後の誕生日であった。当時、最愛のクララ・シューマンは脳卒中で倒れ、死の淵にあった。ブラームス自身も病に侵されており、自らの死期を悟っていた。

全 4 曲からなり、第 1~3 曲が旧約聖書から、第 4 曲は新約聖書からとられている。第 1 曲「人の子らの運命は」は、重厚なピアノの連打と下降旋律が「人間に起きることは獸にも起きる」と、不可避な死を冷徹に説く。第 2 曲「私は顔を向けて見た」は、「死んだ人は幸いだ。しかし、それ以上に幸いなのは、まだ生まれてこない者だ」と徹頭徹尾、厭世的。第 3 曲「おお死よ、なんとつらいものか」の前半では「満ち足りた者にとっての死の苦味」が、後半では「老いた者にとっての死の甘美さ」が説かれ、ブラームス自身の諦観が露わになる。第 4 曲「たとえ私が人の子の言葉で語ろうとも」では、それまでの重苦しい雰囲気が一変し、情熱的な旋律のもと、「愛」だけが死の恐怖に打ち勝つと宣言する。

K.ヴァイルの作品

《三文オペラ》はヴァイル&ブレヒトの代表作で、特に挿入歌「マック・ザ・ナイフの歌（メッキー・メッサーのモリタート）」は大ヒットを飛ばした。物語は、貧困層の悪党マッキーと彼らを束ねて金儲けに奔走するピーチャム、そして利権を貪る権力者の姿を通して、資本主義の欺瞞を痛烈に風刺している。

《ロスト・イン・ザ・スターズ》と《ニッカーボッカー・ホリデイ》は、アメリカ亡命後に書かれた音楽劇。先に書かれたのは《ニッカーボッカー・ホリデイ》で、1938 年作のミュージカル・コメディ。17 世紀のオランダ植民地ニューアムステルダム（マンハッタン）を舞台に、独裁的な新総督ストイフェサントと、命令されることが嫌いな主人公プロムの対立を描く。「セプテンバー・ソング」は老総督が人生の秋（黄昏）に寄せた歌で、これまでに多くの歌手がカバーしている。《ロスト・イン・ザ・スターズ》は、ヴァイルの死の前年に完成した「ミュージカル・トラジエディ（音楽悲劇）」。アパルトヘイト下の南アフリカを舞台に「人種問題」というシリアスなテーマを扱っている。表題曲の「ロスト・イン・ザ・スターズ」では、広大な宇宙で神を見失った人間の絶望と祈りが歌われる。

「セーヌ哀歌」は、ヴァイルがパリに亡命していた 1934 年に作られたシャンソン。華やかなパリの街角ではなく、セーヌの「川底」に沈んだ悲しみや死に目を向けたバラードである。